

大澤典子のすぐ目の前を歩く令嬢の尻肉が、きゅつきゅつと小気味よく上下運動を繰り返す。

乳房と股間で両手がふさがり、そのために、尻の割れ目を隠すだけの余力が樹里亜にはない。

そして、それは典子もまた同じであった。

右手の手のひらを股間に、左手を胸にまわして、なんとか局部と乳首が晒されるのを防ごうと、眼鏡の少女は躍起になっている。残念なことであるが、典子には腕は二本しかなく、そこで本当は誰にも見せたくない尻の割れ目は、こちらにも相田樹里亜同様に剥きだしとなっている。

「は、恥ずかしい……」

痺れるような恥ずかしさ。頭の芯がかつかと燃えあがるような屈辱感。大澤典子は必死になって小刻みな苦しみと闘う。

胸を小さな針でちくちくつつかれるような苦しみ。少女たちは顔を真っ赤にして耐えている。

月明かりが煌々として森の小道を照らしだし、人柱の少女たちの姿を意地悪く白く浮かびあがらせる。



「ああつ、もう、新谷君っ！」

相田樹里亜が前に行く新谷に怒鳴った。いったい、お嬢様はなににそれほど立腹したのか。

「そ、そんなに、お尻を私に向けないでくださる？　き、気になってしょうがないじゃないの！」

先頭に行く新谷は男性であり、そこで、典子たちのように自分の局部を隠して前かがみになるようなこともなかったし、不自然な内股を作ることもしなかった。相田樹里亜は、そんな少年の尻の動きが気になって仕方がないようである。

「わ、私にお尻を向けるなんて、向けるなんて……」

「見なきゃいいじゃないか」

少年は振りかえずに言った。確かにその通りである。相田樹里亜も正論に口ごもっている。

きつと。

大澤典子には我^がの強い令嬢の気持ち^がが察せられる。相田樹里亜は少年の匂いに強く惹かれ、反応しているのに違いない。

自分が生身の肉体を剥きだしにされたことで、身体全体が男性の気配に敏感になっ

ている。

男性が女性の裸に敏感に反応するように、女性もまた男性の体に反応する。理性ではかれる意識の部分ではない。もっと深い、獣の反応。

相田樹里亜は自分の獣の部分が大きくなっていくことを恐れている。恐れているから口数が増える。話のつかかりがないから、いきおい不平や不満が増えることになるのだ。

「大澤さんも、黙ってないで、なにか言ったらどうなの？」

相田樹里亜は相変わらずヒステリックなまま。

「なにか言ったらって言われても……」

典子はそう言いながら、相田樹里亜とその前に行く少年の尻肉を見ている。男性と女性の違いもあって、少年の尻のほうが遥かにコンパクトで見えてくれるがいい。

「まったく……」

お嬢様は口のなかでむにゃむにゃと不平を呑みこんだ。文句を言いながら、令嬢は一人で引きかえすことはなかったし、むしろ、新谷少年に置いていかれないように、必死に裸足^{はだし}の足を運んでいる。

と。

「……………」

先頭を行く新谷少年が不意に足をとめた。

前かがみに足もとばかりを見ていた樹里亜の額が、少年の背中にぶつかる。

「……ちょ、ちょっと」

御令嬢は文句を言いかける。それに少年がかぶせるようにして言った。

「見て、あそこ……」

典子も仲間のほうに近づいて、少年の指差す方角を見やった。なにかが燃えている。焚き火だろうか。前方の森に赤い光が見て取れる。

——とにかく森の道に沿って行くように。

担任の古内ヒカリはそのようなアドバイスを生徒たちに出していたのだが……。

「……行ってみる?」

典子がリーダーに尋ねた。明かりは前方、今まで歩いてきた道の先にある。進まぬわけにいかない。だが。

「い、いやよ……」

樹里亜が首を強く振った。

「あ、あんな明るいところ……」